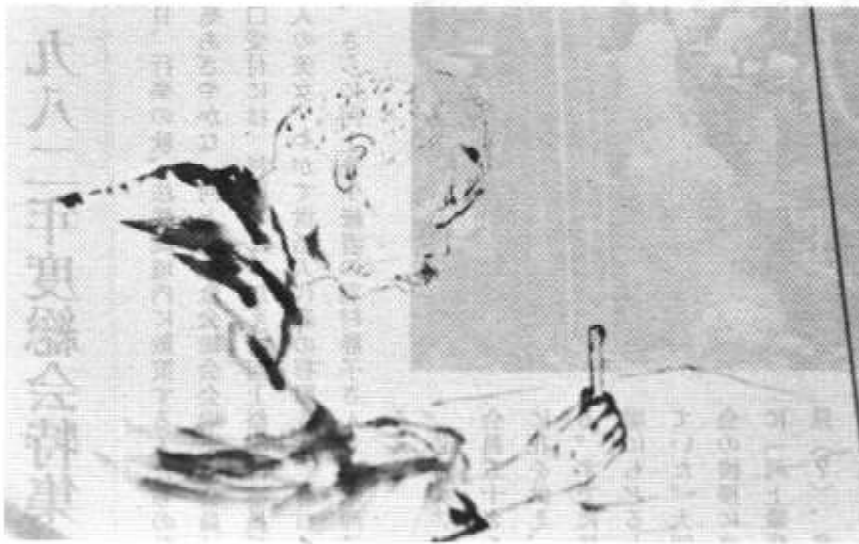




津田青楓筆（脇村義太郎氏所蔵の画帖より）

河上肇記念会報

No. 13

1983. 1. 10

〒542

大阪市南区長堀橋筋一―三（丸善石油ビル）
 千代田商事内 河上肇記念会
 電話 （〇六）二五二―三六九六
 振替口座 大阪 三一三一九五

目次

一九八二年総会特集	
世話人代表挨拶	杉原 四郎
河上先生の思い出など（講演）	脇村義太郎
河上肇の転期と詩（講演）	一海 知義
王学文先生と交流を	生沼 曹喜
音読会とその産物―『自叙伝』音読会と	
『「貧乏物語」の世界』	塩田庄兵衛
故福田秀爾のマイクロー譯伝	稲田 素臣
会員通信	
西川勉氏を悼む	細川 元雄
当 番 日 誌	
	20
	19
	16
	16
	14
	13
	(5)
	(2)
	(2)

一九八二年度総会特集

十月十七日、行楽の秋、法然院境内に散策する人たちの数もふえた。大久保氏揮毫あざやかな「河上肇記念会総会会場」に会員はつきつきと集まる。入口受付には、杉原さん、加えて河上祭実行委員長の京大生宮本さんと二人の美女。やがて世話人代表の杉原先生、今日の講師脇村、一海両先生、さらに河上先生縁者の羽村静子さん、鈴木洵子さんの顔もみえる。



定刻本堂で法要。出席会員五十名をこす。墓前に花を供え、一同参拝する。すでに昼食の並ぶ会場にもどると正午をすぎていた。大門英太郎氏開会の挨拶に立つ。この会に「河上肇症候群」を発見(?)、名付けられる橋本院主の法話を拝聴、総会日程に入る。今年は二人の先生の講演、脇村先生ご持参の河上の書と絵の帖装本二冊の展示、さらに東京河上会の生沼曹喜氏より中国王学文先生の情報紹介。塩田先生

による音読会とその産物。

閉会を前に、大門氏より会則の説明があり、承認をえた。予定より一時間延び、大橋隆憲氏閉会の挨拶に立つ。恒例の梅干と進々堂のパンをお腹に入れ、参会者夕暮の帰路につく。(司会大久保、カメラ岡村、マイク細川、本年小泉氏の加勢をえる)

なお承認された会則は本会報別冊の「会員(仮)名簿」に掲載した。

世話人の代表挨拶

杉原四郎

本日は、河上肇記念会の本年度総会に多数ご出席下さいまして、私ども大へん喜しく思っております。毎年のごとであります、京阪神だけでなく、四国、九州、あるいは関東から遠路はるばるこの会におこしいただく方々があり、非常に心強く思っております。とくに本年は、羽村静子さま、鈴木洵子さまのご遺族の方々もご出席していただき、またこれからお話していただきます脇村先生も東京からおこしいいただき、さらにたいへん貴重な資料をご持参いただき、この会に花を添えていただきましたこと、たいへんありがたく存じております。この記念会も十年を経て、いろんな意味で形を整えていくことが必要かと思ひまして、会則の案を用意して、今日おくばりいたしました。この点につき、のちはど大門さんから説明、ご承認をいただきたいと思います。

また先般お送りいたしました会報にも出ており、皆さま方のご支援をえて、今岩波書店から刊行しております『河上肇全集』は、おかげさまで、本年一月以来、順調に月に一回配本のペースを今のところ守ってまわっております。編集委員七名がそれぞれ数巻ずつ担当いたしております。

す。これが順調にいきますと再来年の二月に第一期二十六巻が終ります。つづいて第二期七巻というのが続くわけですが、かなり息の長い仕事であります。今後ともどうかよろしくご支援をお願い申し上げます。その編集委員の一人の海さんが今日またたいへん興味深いお話をしてください。この会としてまことに相応しいお話で喜んでいる次第です。どうか最後まで、ごゆっくりとご歓談下さるようお願いいたします。

(文責事務局)

講演

河上先生の思い出など

脇村 義太郎

実は今日の会に健康がゆるせば出席するようにとのお話でありました。百年祭のときにお手伝をしなければならぬのが、当時健康を害しており、おうかがいすることができなく、そのおわびと、河上先生のご遺族の方々に一度お目にかかりたいというのが予ての念願でありましたので、

今日出席した次第です。

私は話のかわりに皆さんにご覧いただけるものを持参した次第であります。これをご覧ただいて、ご勘



弁願いたいたいと思っておりますが、何か河上先生の思い出をといてお話がありましたので、少し時間をとらせていただきます。



私が高等学校時代、三高に入学したのが大正七年九月であります。この年の十一月か十二月に河上先生が三高に来られまして、例の「利己心と利他心」という題の講演をされました。それがのちに『社会問題研究』が大正八年一月に創刊され、その第二号にこの講演の概要が――概要と申しますが、河上先生は講演のときには必ず原稿をお書きになって、その原稿をお読みになってお話をなさるということでした――載っております。「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」という文句がありまして、その文句を当時お書き下さった書状を持ってまいった次第です。

それから大正九年に河上先生が和歌山県の田辺、私の郷里にご静養にいらしていただきました。その翌年私が先生のお宅へ伺い、高等学校卒業後、京都大学へ行くか、東京大学へ行くかどうかに行けばよいかをご相談にあり、先生のお話を聞いて東京大学へ行くことにしたわけですが、その時先生は、経済学を勉強するならば京都大学へ来るがよいが、そうでなくて経済学を一通り大学でやって、卒業後実業界へ――私の場合は家業を継ぐため郷里に帰る――という場合は京都で六年居るよりは、三年東京に居る方が将来のために良いだろうと。東京大学の経済学部は

もう空っぽになっているから、大きな期待をしてはいけませんが、東京の町というのは非常に刺激の多い、偉大な町であるから、東京で三年暮らすのがよいだろうというお話でありました。当時三高の佛教青年会を私がお世話をしておりました。その指導教授に山内普郷先生——漢文の先生がおられました、この先生にも大学いずれにすべきかをちょっとお話ししましたら、経済学を勉強して経済学者になりたいのなら、今や東京大学へ行くべきだ、あそこは空っぽだから。京都なんかに行ったら、とても先生になれない、ここは充実しているからと。なるほどこういう考えもあるのかなと思いました。それでも私は学者になるつもりはなくて、東京へ行ったのです。

行ってみると東京の町の大きさに圧倒されました。しかも京都は三高の学生を非常に大事にしますから、いい気持ちで遊んでばかりおったのですが、東京ではとても学生を相手にしてくれませんので、図書館なり、研究室に立て籠もって勉強するほか仕方がなかった。二年ばかり一生懸命勉強し、なお暫く引き続き勉強したいと思って、大学の方へ申しましたら、大学で助手にとってやるということで、助手になり、二年経つと助教授にしてやるからということで、とうとう大学に残り、遂に郷里に帰らず、今だに経済学をやっています。そのうち京都へおうかがいして、河上先生にご報告いたしておりますと、先生が何を専攻しているのかと言われますので、私は海運を勉強しろということで、海運を勉強することになりましたと言いますと、先生はどうも海運というのは勉強してもつまらんから、むしろ会計学の方がよいのではなからうかというご意見を言ってお下されたのですが、実は今だに海運と縁が切れないでおるような次第です。

最後に、戦後になりました私は京都の日新電気という会社——やはり河上先生の奥様の弟さん平田周三さんという方が関係しておられました

会社で、住友系の会社ですが、その社外重役を頼まれ——これは私の父もずっと関係しておったので、父のあとということで——毎月京都に来るようになりました。京都に来ていた間に、京都の町の本屋街の変遷、大正七年頃と戦後とではほとんど変わっておりますので、これは一体どういう風にして本屋街の変遷が生じたのかということ調べてみようと思いました。

丁度われわれの学生時代に本屋街の中心でありました丸太町の通りは、西の方に弘文堂があり、東の橋の近いところに西川誠光堂という二軒の本屋がありました。この本屋の興亡をはっきりさせないとどうも丸太町通りの本屋街のことがよくわからないのではないかと、昔を思い出して弘文堂のことを調査しはじめたのですが、如何せんその頃には知っている人がだんだんおられません、八坂浅太郎君（八坂浅次郎の息子）はおったのですが、同君も記憶が正確でなく、昔のことがはっきりしない有様です。そのうち、偶然に『貧乏物語』初版の奥書きをみまして、弘文堂の代表者が滝本秀三郎という名前になっている、これはわれわれの全く知らない人ですので、再び八坂浅太郎君をつかまえ、これは誰だといいますと、同君は自分によく知らないが、京都の西の方に津田八郎兵衛という金を持っている人があって、その人の代理の代表者だということで、このことがわかりました。どうも津田八郎兵衛という人は、私の姻戚関係に当る京都の八代仁兵衛という西陣の織物問屋の親戚ではなからうかと思ひ、八代氏に会って聞きますとその人は自分の兄だということでした。さらにこの弘文堂の代表者滝本は自分の弟だということでした。それでは一体どうして弘文堂に入ったのかと問いますと、それは全く聞いていない。その人たち——津田八郎兵衛氏も滝本秀三郎氏ももう死んでいるが、子供たちがいるから聞いてやろうと、私も一緒に聞いて聞いてみたのですが、父たちが弘文堂に関係していたことすら知らないのです。

いろいろ聞いているうちに、どうも弘文堂が『貧乏物語』を出版するときの資金をこの人たちが出したことがわかった。二年間程出して、もう弘文堂が経済的に確立したからということになり、弘文堂が数万円を返して——これは八坂浅太郎君が話したのですが——この人たちは手を引いたということです。やっと弘文堂がどうして古本屋から出版社になったわけですか、『貧乏物語』を出版することができたかという事情がわかったのは、復刻の『社会問題研究』の月報に載っている座談会に、小島祐馬先生の世話で弘文堂が出版することになったのだということになっていました。それは全く間違いです。この点は末川博先生に私がいろいろお尋ねして、このことをたてましたが、やはり末川先生はよく事情を知らない、あの『貧乏物語』が出版されたときはまだ自分は学生、大学院生ぐらいで、河上先生のお宅へは余り出入しておらず、自分はまだそういう話まで聞く立場になかった。のちにお聞きになりましたかと聞くとそれものちに聞いていないということでした。結局一般には小島先生のお世話だということになっておりますが、それは間違いだということが関係者幾人かの人の話からわかったわけでありました。私が大学をやめて約二十年前にこのようなことで再び京都との関係、あるいは弘文堂とのことが復活しました。爾来機会があれば、河上先生の書、絵画などできるだけ集めたいと思って、集めております。今度の全集にいくらかお役に立つならばとも思っている次第です。

どうも私の河上先生の思い出と近年の関係を申しまして私の責をはたさしていただきます。できるだけこの会合には健康さえ許せば出席したいと思っております。

(文責事務局)

講演

河上肇の転期と詩

一 海 知 義

河上肇という人は、人生の転期ごとに必ずといっていいほど詩歌作品をのこしております。とくに重大な転期に直面したときには、必ず詩歌に託してその心情を吐露しているのであります。

「転期」とは、もっと平たいことばを使えば、「区切り」といってもよいでしょう。人生の区切りはいろいろありますが、一般的日常的なこととしては、入学や卒業、就職や結婚、そして誕生日や年末年始などもそのうちにかぞえてよいかと思えます。もちろん河上さんのように、きわめて波瀾に富んだ稀有な人生を歩んだ人にとって、真の「転期」はそうした日常的な一般的、誰でもが経験するそれではなかったでしょう。しかしそんな河上さんにとっても、年の変わり目やみずからの誕生日は、一つの区切りだったらしく、それらの日々に（とくに晩年には）しばしば詩歌を作っております。

真の「転期」の詩をご紹介する前に、まず、生日、すなわち誕生日の詩歌を見してみよう。

河上さんは



「明治十二年（一八七九年）十月二十日の黎明に」生まれました（『自叙伝』岩波文庫版一―23）。十月二十日が生日であります。河上さん晩年の自選詩集（筑摩版『河上肇著作集』第十一巻）に見える生日の最初の作品は、昭和十三年（一九三八年）、すなわち足かけ五年の刑期をおえて出獄した翌年の作、題して「天は猶お此の翁を活かせり」という漢詩作品であります。

昭和十三年といえば、河上さんは数え年で六十歳、たしかに人生の一つの「区切り」だといってよいでしょう。そしてこの年、河上さんは文字通り「六十の手習」として本格的に漢詩作りの勉強をはじめました。そうした二つの「区切り」のよさが重なって、河上さんはすこし居すまいを正し、自選詩集にのせる最初の生日の詩として、独習しはじめたばかりの「漢詩」を作ったのかも知れません。

「天猶活此翁」という詩題は、出獄の翌年、刑余老残の身の作者の、当日の心境をよくあらわしています。ただしこの五文字、河上さんの造語ではなく、晩年に傾倒していた中国の詩人陸放翁（りくはつかう）の詩句から採ったものであります。その間の事情については、小著『河上肇詩注』（岩波新書）をご参照ください。なおついでにおことわりしておきますが、私の専攻分野は中国文学ですので、漢詩以外の詩歌作品については生兵法をさけ、作品紹介だけにとどめたいと思います。

さて、河上さんの日記によりますと、昭和十三年十月十二日（誕生日の八日前）の条に、つぎのような記事があります。

「何ヶ月か前に堀江君（注、堀江邑一氏）の貸してくれたる『On war with Japan over China』のうち、毛沢東の談話筆記

漢詩はこのことをふまえ、まずつぎのようなすこし長い序文がつけられています。

昭和十三年十月二十日、第五十九回の誕辰を迎へて、五年前の今日を想ふ。この日、余初めて小菅刑務所に収容さる。当時雨降りて風強く、薄き囚衣を纏ひし余は、寒さに震へながら、手錠をかけ護送車に載りて、小菅に近き荒川を渡りたり。当時の光景今なほ忘れ難し。乃ち一詩を賦して友人堀江君に贈る。詩中奇書といふは、エドガー・スノウの支那に関する新著のことなり。今日もまた当年の如く雨ふれども、さして寒からず。朝、草花を買ひ来りて書齋におく。夕、家人余がために赤飯をたいてくれる。

そして詩はつぎのようになつてゐる。

秋風就縛度荒川　秋風縛に就いて荒川を度りしは、

寒雨蕭々五載前　寒雨蕭々たりし五載の前なり。

如今把得奇書坐　如今奇書を把り得て坐せば、

尽日魂飛万里天　尽日魂は飛ぶ万里の天。

さいごの句の「万里の天」は、中国大陸の空をさしています。スノーの『中国の赤い星』に書かれている革命進行中の、中国の空であります。詩題に使われた陸放翁の詩句は、「心は己に斯の世を忘るるも、天は猶お此の翁を活かせり」というのですが、「己に此の世を忘れ」たはずの「此の翁」は、詩の前半では五年前の生日、小菅刑務所に移送された悲哀をうたいながら、後半では、中国に輝く赤い星に尽日（一日中）思いを馳せている、というのであります。「尽日魂は飛ぶ万里の天」。この六十翁、どうしてなかなか「斯の世を忘れ」てはおりません。その精神は決しておとろえてはいない、ということが詩をよめばわかるのであります。

「詩集」に見える第二番目の生日の詩は、これも漢詩で、しかも二首、翌昭和十四年の誕生日当日の作であります。



一身瘦尽如枯葉

万境踏来似隔生

祇喜回頭無所悔

誰知這箇野翁情

一身瘦せ尽して枯葉の如く、

万境踏み来りて生を隔つるに似たり。

ただ喜ぶ頭をめぐらして悔ゆる所なきを、

誰か知る這箇野翁の情。

一身瘦尽癯存骨

万巻抛来空賦詩

憐憫刑余垂死叟

半生得失待誰知

一身瘦せ尽して纔に骨を存し、

万巻抛ち来りて空しく詩を賦す。

憫を憐む刑余垂死の叟、

半生の得失誰を待ちてか知らむ。

第一首の起承二句は、これも陸放翁の句から借りたものです（同年十月二十八日付津田青楓あて書簡参照）。放翁の句は、「一身膏脂愈瘠尽、万巻簡編如隔生」。

第二首の結句に「半生の得失誰を待ちてか知らむ」とうたうのは、詩的表現による懷疑だといってよいでしょうが、第一首の転句に「ただ喜ぶ頭をめぐらして悔ゆる所なきを」というのは、はっきりと河上さんの自負を示しております。足

かけ五年にわたる獄中生活において、ついにマルクス主義への信念だけは堅持し通したという自負であり、

それこそが、この筆甲（還曆）の翁を支えるものだったといえるでしょう。生日という「区切り」の日にそのことをうたうのは、思想家河上、詩人河上の、内面からの噴出だったのであります。

昭和十五、六年、「詩集」に生日の詩は見えませんが、十五年の日記には、

十月二十日（日）

余の誕生日にしてまた七年前初めて小菅刑務所に收容されし記念日なり。昼食を早く済まして長谷部君（注、長谷部文雄氏）の処へ碁を打ちにゆく（以下略）。

とあるだけあります。また翌十六年、日記にはただ一行、

第六十三回の誕生日。芳子（注、次女）牛肉のすき焼をおこる。とあります。

太平洋戦争の勃発（十二月八日）が迫り、また河上さん自身、出獄後も特高警察などの監視がつき、歳末、ようやく保護観察所の許可をえて東京から京都に住居を移す。そうしたことが重なったからでしょうか。したがって「詩集」第三の生日の詩歌は、翌十七年（六十四歳）を待たねばなりません。こんどは短歌二首であります。

いとけなきわれをすずろに愛し（かな）
みしおほちのとしいまこえむとす
手錠して荒川の獄に移されし秋雨（あきさめ）
のけふぞ忘らえなくに

「われをすずろに愛し（かな）みしおほち」は、河上さんが八歳のときに亡くなった母方の祖父、文芸の趣味を解し漢詩や和歌をたしなんだ（『自叙伝』）という祖父松野河上又三郎であります。河上さんが晩年の生日に想起するのは、そうしたきわめて遠い過去の思い出であるとともに、同じ生日にまつわって忘れがたいのは、やはり生々しい近い記憶、小菅

刑務所への移送であったと、詠草の第二首はそう訴えています。

翌昭和十八年、河上さんは誕生日にあたって長篇の詩を作ります。題して「癸未十月二十日、満六十四歳の誕辰に」。癸未はいうまでもなく昭和十八年。詩は六章にわかれ、つぎのようにうたわれます。

十年まへのけふは
身に囚衣を纏ひ
手錠はめ
強盗犯と繋がれて

風強く寒かりし秋雨の中を
蕭々として荒川を度りしに
誰か思はむ
今なほいのちありて

今なほいのちありて
老を養ふ旧都のほとり
風は柔かなり東山の麓
陽は暖かなり南斎の縁

久しく熱を病みて
破屋の裏に閑臥し
初めて起きて隣街に行き
買ひえて帰る黄菊白菊
牛久なる女の寄せし紅玉の小豆

饗科ゆ友の齋らせし真珠の梗

配給の菜を羹にして

朝餉には青蔬赤飯

青蔬赤飯

黄菊白菊

窃に甌北が「白虎青龍」に倣ひ

聊かこの生日の「窮著」に擬す

「甌北」とは、河上さんがその「詩話」を愛読した清朝の詩人趙翼の号であります。「白虎青龍」は、豆腐と青菜のそまつなスープ、そのシヤレた雅名として、趙翼の詩「儒餐」（学名の食卓）に見えます（くわしくは小著『河上肇と中国の詩人たち』七三頁参照）。

「詩集」に見える河上さんの生日の詩は、以上をもって終ります。翌昭和十九年は、太平洋戦争が激化する、というよりも、日本の敗色が濃くなりはじめ、極度の食糧難の時代にあります。十九年十月二十日の日記、

余が誕生日にて、満六十五になりたる訳なり。朝米余り元氣あらず。（以下略）

翌二十年、日本は敗戦の日を迎えます。八月十五日、その日の詠草はのちに紹介しますが、約二か月後の十月二十日はまだ極度の混乱のなかにあり、その日の日記には、「偶然にも何十日目の鮮魚の配給あり、此の日を祝するためにをかしらつきに食膳に上ぼすことを得たり」とわびしさやかな喜びをしるすにすぎません。ちなみにこの誕生日の日記に見える当日の献立を、かかげておきましょう。

（朝） 米代用として配給されしつま芋のわしたるもの。之を飯の

代りとなす。

(昼) 小豆飯。小魚からあげ三尾。馬鈴薯。

(夕) お萩五個。

さて、生日の詩歌のほかに、獄中から晩年にかけての年末年始の詩（除夜の詩、元旦の詩）がかなり興味深い問題を提供するのですが、時間の関係でそれは省くことといたします。生日や年末年始が、人間にとって一つの区切りとなることはたしかですが、それは人生の真の転期とはいえません。河上さんにとって、真の転期とは何だったのか。以下、河上さんの「転期と詩」について話をすすめてみたいと思います。

河上さんは成年に達したのち、たびたび人生の転期をむかえ、その都度おのれの心情を詩歌に託して表出しています。河上さんは思想の人であるとともに、詩歌の人であったといつてよいでしょう。ただし最初の転期であった山口高校卒業前、文科から法科への転科事件のときには、作品をのこしていませんので、第二の転期からお話することにいたします。

第二の転期は、明治三十八年、数え年（以下同じ）二十七歳のときに、訪れました。読売新聞に千山万水樓主人の名で連載し、文名を一世に高めたつあった「社会主義評論」、それを突然擱筆し、一切の教職をなげうって宗教団体「無我苑」に身を投じたときであります。いわゆる絶対的利他主義の実践のためでありました。そのときの句、

捨てし身の日日拾ふいのちかな

これが俳句なのかどうか、素人の私にはわかりません。しかしこれがあるつきつめた、体験にうらうちされた、哲学的告白であることは、わかります。

第三の転期は、著書『資本主義経済学の史的発展』に対して、門弟の

楠田民蔵から痛烈な批判をうけ、真のマルクス主義者たる人と決意したとき（大正十三年、四十六歳）、その際の短歌一首、

旅の塵はらひもあへぬ我ながらまた新たな旅に立つかな

第四の転期は、大正十五年、愛息の死という衝撃によっておこった、すくなくともそれが契機の一つとなった、と私は考えています。その翌年河上さんは、さきの楠田民蔵にあてた書簡のなかに、つぎのような一篇の漢詩を書きこみました。

去秋亡愛子

今春別慈父

傷心半似安

洛陽一書齋

「傷心半は安らかなるに似たり」という微妙な表現は、愛息の死が実践活動へとふみ出すスプリングボードになったことを示唆するように、私には思えます（くわしくは「河上肇——学問と詩」一四六頁以下参照）。

さて、つぎの第五の転期は、さきの第三と第四の転期によって準備されたといつてよいでしょう。すなわち真のマルクス主義たらんと目ざすこと、そして象牙の塔のなから実践活動へと一歩ふみ出すこと、それは時の権力者にとって許容の範囲をこえ、やがて京大辞職（実質的には追放）という事件がおこります。それが第五の転期です。昭和三年（一九二八年）四月十八日のことでした。小林多喜二の小説『一九二八年三月十五日』、その日付のもつ重味と、河上さんの「追放」とは、もちろん無縁ではありません。

そのときの一句、

荷をおろし峠の茶屋に告天子きく

河上さんはこの句を作ったときの心境について、つぎのように語っています（『自叙伝』一—225）。

私は還暦を過ぎて全くの隠居になり切るまでは、短歌も俳句も滅多に作ったことはなかった。「捨てし身の日々拾ふいのちかな」というのは、まだ三十にならぬ頃、無我愛運動に関係した前後の句だが、この「荷をおろし」というのは、ことによると、それ以来初めての句であるかも知れない。一身上の大きな変動を感じた場合でなければ、こんなものを作る気遣いのなかった私が、この時書きつけた此の句には、おのずから当時の気持が反映されているものと考ええる。その気持は他人に通じはしないだろうが、ここに「峠」と云っているのは、これより半年前、榎田君に宛てた手紙の中で「私もあえぎながらも急坂を登りたいと考えて居ります」と言っている、その急な坂道の途上に横たわっている一つの峠を指しているのだ、——今その峠を越したからとて旅は最早や済んだと云う訳でもなく、またこれから先き、更にどんな峠に出喰わさないと限らないが、しかし、自分はともかく今ここで一生の旅路における一つの峠を越した、という意味であり、最後の「ひばり」と云っているのは、丁度その頃の季節の鳥であった上に、雲雀、告天子、天鵝などと書く漢字の字づらが、その時の自分の気分に相応わしく思ったからであろう。

第六の転期は、日本共産党への入党がもたらしたものであります。昭和七年（五十四歳）八月のある日、すでに官憲の目をのがれて地下にもぐり、ある隠れ家にいた河上さんのもとへ、日本共産党の使者が訪れます。使者は河上さんにむかって、「日本共産党は中央委員会の決議を以て今回貴下を党員に推薦した」といい、機関紙『赤旗』編集上の意見の具申等その任務を告げます。『自叙伝』（二—173）はそのときのことをつぎのようにかいています。

「とうとうおれも党員になることが出来たか！」
私は誰を相手にその喜びを語ることもしきず、ひとり無量の感慨

に耽りながら、遂に一首の歌を口ずさんだ。

たどりつきふりかへりみればやまかはをこえてはこえてきつる
ものかな

この短歌は、現在の法然院の河上夫妻のお墓のかたわらに、歌碑として石にきざんで建てられています。河上さん自身、この一首について、「当時誰かが短歌雑誌で、この歌は少しも古今調を脱していない、プロレタリア文学も何もあつたものではない、と冷やかしたそうだが、私はこの一首の歌には五十四年に亘るいのちが集約されているので、古今調がどうのこうのと云った標準で評価されるような歌読みの歌ではないのだ」（『自叙伝』二—174）と、すこし乱暴なことをいっております。

河上さんは日本共産党に入党した翌年、昭和八年（五十五歳）の一月十二日、さきの隠れ家とは別の場所（画家椎名剛美氏の家）で検挙されます。治安維持法違反の容疑でありました。これまた一つの転期であり、第七の転期にかざえてよいでしょう。このとき（ひと月ほど後）河上さんは、それまでの人生を総括するような漢詩を作っております。草稿は一部分にだけ訓点を施したもので、ここでは全体をよみくだし文になおして示しましょう。

年少夙に松陰を欽慕し
後に学ぶ馬克斯礼怒

読書万巻竟に何事ぞ
老来徒らに為る微裏の人

一篇は自嘲の気味を帯びておりますが、そのうらには過去のおのれの自負がうかがわれます。「読書万巻」の句は、たぶん「万巻の書を読むに非ざるよりは、寧ろ千秋の人と為るを得ん、一己の労を軽んずるに非ざるよりは、寧ろ兆民を安きに致すを得ん」という松下村塾塾生のことばをふまえているのでしょう。

検挙起訴された河上さんは、スピード裁判の結果、その年の八月には「五年」の判決、九月に控訴のとり下げをきめて下獄、そして昭和十二年（五十九歳）の六月十五日早暁、満期出獄します。それは河上さんにとって、第八番目の転期でした。

出獄の朝、新聞記者たちに示した手記の末尾に付された短歌三首、

ながらへてまた帰らむと思ひきやいのちをかけし旅にさすらひ

長き足をらくにすわれと吾妹子が縫うて待ちにし此の座蒲団よ

巖清水あるかなきかに世を経むとよみいでし人のいのちしのばゆ

河上さんが本格的に短歌の勉強をはじめた、というよりも、短歌を作りたいという内的衝動を感じて創作にはげみ出したのは、下獄して二年ほど後のことであつたようです（『自叙伝』四一—89）。『獄中日記』をよみますと、右の三首は、前文である「手記」（その初案は四か月前からかきはじめていた）とともに何回も推敲が重ねられており、その推敲のあとを丹念にたどれば、当時の河上さんの微妙な心理がわかるだけでなく、「表現」に対するきわめて「神経質な」心の使い方を知ることができます。

右の第八の転期の宣言、それは河上さん自身のことを借りれば、「挽歌」、みずからの軀をひく歌でした。一切の政治活動、言論活動から身をひく、「没落」宣言だったのであります。だが河上さんは、マルクス主義がまちがっているとは、ひとこともいわなかった。そのことは絶対にとめなかった。戦争に対しても、検事に対しても、あらゆる「手記」のなかでも。そして『獄中日記』のさいごには、一行、こうかきました。

河上肇万歳／マルクス主義万歳／

河上さんが出獄した翌月（昭和十二年の七月）、日中戦争がはじまります。そして、東京から京都へ住居を移す昭和十六年の十二月、太平洋

戦争が勃発します。刑余の身の河上さんにとって、老後の生活はそのまま戦時下の生活でした。その九年間の哀歎は、丹念にかかれた日記と、おびただしい数にのぼる書簡類に見ることが出来ます。

さて、第九の転期は、昭和二十年（六十七歳）八月十五日に訪れました。日本敗戦の日です。その日、河上さんが日記に記した短歌一首、

あなうれしにもかくにも生きのびて戦やめるけふの日にあふ

ほとんどすべての日本人がくやし泣きに泣いたこの日、河上さんは右のような一首を作って、訪れた平和を心から喜んだのでした。敗戦の日、海軍兵学校の一生徒だった私は、三十数年後のこんにち、この歌をよみかえすたびに、ああ、日本人にもこういう人がいたのだ、とそのことに、あらためて感動するのであります。

昭和二十一年一月三十日、河上さんは「死」というさいごの転期をかえます。このいかんともしがたい第十番目の転期を前にして、河上さんは一篇の漢詩を作ります。題して「擬辞世」、辞世のつもりで、というほどの意味であります。

多少波瀾

六十八年

聊従所信

逆流掉船

浮沈得失

住衆目憐

俯不恥地

仰無愧天

病臥己及久

氣力衰如煙

此夕風特静

願高秋永眠

こゝでうたわれているように、「いささか信ずる所に従いて、流れに逆らいて船に掉された」のが、河上さんの人生でした。そして「俯して地にはじす、仰いで天にはずるなし」というのが、河上さんの結論です。しかしこの「辞世」は河上さんの絶筆とはならず、詩歌のさいこの作品、文字通りの辞世は、死の二週間前に作られたつぎの作品です。題して、「同志野坂を迎へて」。いかにも河上さんにふさわしい絶筆だといつてよいでしょう。

一

同志野坂

新たに帰る

正に是れ百万の援兵

我が軍これより

更に大に振はむ

刑余老残の衰翁

龍鐘として垂死の床に危坐し

声を揚げて喜ぶ

二

われもし十年若かりせば

菲才われもまた

筆を提げ身を挺して

同志諸君の驍尾に附し

澎湃たる人民革命の

滔天の波を攀ちて

共に風雲を叱咤せんに

三

身はこれ葉末における露

落ちなむとして幸に未だ落ちず

けふのよき日に逢ふを得たれども

病臥すでに久しきにわたりて

体力ごとく消え去り

氣力衰へてまた煙の如し

遺憾なるかな

四

同志野坂

國を去りてより十有六年

万里を踏破して

再び帰り來たるの日

空しく病床に臥して

思ひを天下の同志に馳せ

切にその奮起を祈りてやまず

河上さんは、詩人としては素人でした。プロの詩人ではありません。だからというわけではない、いや、だからということもあってでしょうが、その作品は、河上さん自身のことを借りていえば、「玉石混淆」です。以上紹介して來ました「転期の詩歌」もまた、例外ではありません。

ところで私自身は、漢詩のことがすこしわかるだけであり、河上さんの詩歌全体を批評する資格はないのですが、いまあらためて一つのことを思います。——河上さんは、人生の重大な転期に直面したとき、必ずその心境を詩歌に託して表白した。河上さんは、思想の人であるとともに、詩歌の人であった、と。

河上さんの場合、転期に作られた作品は、すべて「状況」の「解説」

としてでなく、「内面」から噴き上げて来るものの「表出」として、生まれたのであります。河上さんは、一方では「散文」を用いて、くどいほど「状況」の「解説」をいたしました。しかしそれで事足りりとはしなかった。できなかったのであります。転期は、常に詩と結びついていました。河上さんはすぐれた学者であるとともに、本質的に詩歌の人だったのであります。

王学文先生と交流を

生 沼 曹 喜



一海先生の『河上肇そして中国』にも紹介されておられます中国の王学文先生は、若いときに日本へ留学されまして、第一高等学校の予科から金沢の第四高等学校をへて、大正末年に京都大学経済学部にご入学になられ、河上先生のゼミで、先生の教えを受けられ、河上先生を個人的に親しくしておられた。同時に石田英一郎、岩田義道等の組織していた

京大の社会科学研究会に参加され、石田、岩田両氏とも親交があったように存じあげております。私になぜ王学文先生のことを知ったかと

言いますと、実は私の中学時代の友人で柘植秀臣君——自然科学者で、法政大学の社会学部の教授ですが——が尾崎秀実さんと家族ぐるみ、非常に親しく——どちらも岐阜県出身なものですから——、尾崎さんが一高に入られ、しょっちゅう柘植君の家に来ておられました。当時中学生の私も柘植君の家にたびたび行き、それで一高時代の尾崎さんに私も面識がありました。このような関係で、柘植君は、尾崎さんの生涯について関心をもっておられ、実は一九七九年に中国に行かれたときに王学文先生に北京飯店で会われ、尾崎さんとの関係についていろいろお話をなさったらしいのです。そのときたまたま王学文先生の方から自分は京都大学の出身で、とくに社会科学研究会に非常に深い関係があったと、とくに私も存じておるのですが常見つねお——とつくに亡った人ですが——その人に非常にお世話になり、親しくしていたので、常見さんの消息を是非知りたいということだった。そして日本に河上会があることを話すと是非連絡をとりたいとの希望があったようです。その後、柘植君と私はよく会っているのですが、王学文さんのことは話題にならず、たまたま今年の五月柘植君が脳梗塞で入院され、それを機会に奥さんを通じて、王学文さんが言っておられた河上会との連絡を是非実現してほしいと依頼がありました。王学文先生は今年で八十六歳才であり、研究ならびに教育活動に熱心で、マルクス主義経済学の研究家であり、この仕事をなさって今年五十五年に当るので、盛大なお祝が開かれ、人民日報などに載りました。王学文先生の存命中に先生と東西河上会との接触を深めるような機会をつくってもらえないかというのが柘植君の依頼でありました。

東京河上会は白石先生にお願いして今度刊行の会報に王学文先生のことを書いて下さることになっております。今日実は河上肇記念会の例会があると聞き、しかも王学文先生のことを紹介されておられます一海先

生のご講演があるとうかがい喜んで出席させていただきました。この機会には是非この会も王学文先生と何らかの形で接触をされ、中国で河上先生を慕っている経済学者、政治的地位の高い方がおられるのだということとを皆さんにご記憶下さいまして、今後接触を深めるようにしていただければ幸いと思い、この会に出席しました。つきましては今日出席の皆さんで寄せ書きをしていただき、それを柘植君を通じて王学文先生にお送りしたいと思います。（出席者全員色紙に記名する。文責事務局）

王学文、原名王守椿、経済学者。一八九五年生まれ、江蘇省徐州市出身。一九一〇年から二七年までの間、前後して東京同文書院、第一高等学校予科、金沢第四高等学校、京都帝国大学経済学部および大学院で学んだ。中華人民共和国誕生後、全国人民代表大会代表、中国科学院哲学社会科学部委員、経済研究所學術委員、全国政治協商會議常務委員会委員を歴任。（王学文「河上肇先生に師事して」、『人民中国』一九八一年一〇月号の筆者紹介）

音読会とその産物

「『自叙伝』音読会と『『貧乏物語』の世界』」

塩田 庄兵衛

『貧乏物語』につづいて『自叙伝』の音読会を開いています。かなりの人々が参加して下さっています。そしてその産物が出はじめています。音読会とは何か、どんな産物が出はじめているか、今日ここで紹介させていただきます。以下は本年末に法律文化社で刊行いたします『河上肇「貧乏物語」の世界』の本のはしきを私が書きましたので読ませさせていただきます。

『すべての学者は文学者なり。大なる学理は詩の如し』という河上肇のことは私たちにさまざまなことを考えさせます。そして、近代日本のもっともすぐれた思想家のひとりである河上肇の生き方は、私たち現代の日本人にとって無関心でいられない問題をたくさん含んでいます。この人の生涯百周年の記念行事が一九七九（昭和五十四）年秋に京都と東京で開催されたとき、河上肇を過去の人としてではなく、未来にむかって記念する方法を工夫する必要がある、と私を含めた関係者は考えました。

そのひとつの形として、河上肇『貧乏物語』音読会という構想が生まれました。河上肇は、日本の社会科学者のなかで、音読に値する文章家です。そしてかれの代表作のひとつである『貧乏物語』は、発表当時に大ベストセラーであったばかりでなく、六〇年以上たった今日でもひろく読まれています。しかも岩波文庫で二〇〇頁に足りない小さな本です。これを集団的に読んでみようという老若男女数十人があつまって、河上肇『貧乏物語』音読会を組織しました。私はその名義上の代表者を引受けました。私たちは、ある診療所の厚意を受けて、一九八〇年九月か



ら一年間、毎月一回夜間に集會室を借用しました。入口に「河上肇講」と筆太に書いた大きな提灯をぶら下げました。まず、「あ

めんば座」という朗読集団を主宰しておられる西垣登子さんから、発声法の基本を手ほどきしていただきました。毎回前半の約一時間、『貧乏物語』（岩波文庫版）の本文を、交代で、あるいは群読形式で読みすめました。著者の博識と情熱とが、リズム感のあるわかりやすい文章を通じて、こちらの頭と胸とにしみこんでくるような気がしました。

後半の約一時間は、専門研究者の講義をきいたあと、質疑や感想をかわしました。講義は、『貧乏物語』が書かれた時代背景や学問史上の位置づけ、当時の貧乏と現代の貧乏との対比や中国語への翻訳の事情など現代的視点に立ってさまざまな角度からこの古典に接近することができるよう組み立てられました。京都大学経済学部と京都府立総合資料館との二つの「河上肇文庫」についての解説も受けました。テーマは専門的だけれども、高校生の学力で理解できる内容を、というのが、講師にたいする注文でした。

こうして私たちは、『貧乏物語』の世界にいくらか目をひらくことができました。

この講義を書物にまとめようという声が強くなりました。幸いに法律文化社が出版を引受けてくれたので、テープを原稿用紙におこし、各講師が話したときの調子を維持しながら、読みやすいように多少整理して、この本ができあがりました。

河上肇を論じた書物はたくさんありますが、そのなかでこの本はユニークな地位をもつと私は考えます。

どんな内容になるかといいますと、ここでテーマは紹介しませんが、執筆者をいいますと、皆さんのご意見で私が編者となり、最初に「河上肇の人と思想」ということで、書きました。（あと敬称を略させていただきます）同志社大学の望田幸男、京都大学の松尾尊光、立命館大学の

細迫朝夫、甲南大学の杉原四郎、京都府立大学寿岳章子、立命館大学真田是、神戸大学一海知義、京都大学経済学部資料室の細川元雄、京都府立資料館歴史資料係の竹林忠男、以上のメンバーでつくりました本が近く出るようになりました。

「ひとこと付け加えます。『貧乏物語』音読会の成功に力を得た私たちは、一九八一年九月から、これを河上肇『自叙伝』音読会に発展させ、岩波文庫版（全五巻）をテキストに、あらためて各方面の専門家の御協力を得て、一年間のコースを終了にこぎつけました。会員は約一〇〇名に増大し、さまざまな年齢層と職業分野の集団学習会を楽しく進行させることができましたが、その半数近くが女性でした。その講義内容も本書の姉妹篇として刊行の予定です。

そして本年九月から、ひきつづき『自叙伝』をテキストに第三年目に入りました。皆さんの御協力を期待します。」

ということですが、いわば記念会の日常活動のようなことからやっておりまして、御協力していただきたいし、また本が出ましたらご講読していただきたい。

（文責 事務局）



哀辞 一九八二年九月二〇日 本会最長老の会員 耳鼻咽喉科医師 稲田秀爾先生 老衰のため逝去されました。世寿九六才 氏は一昨年の総会まで欠さず出席され、本会の発展に尽力されました。謹んで ここに心から哀悼の意を表します。

故稲田秀爾のマイクロ評伝

長男 稲田素臣

会員 稲田秀爾は昭和五十七年九月二〇日に、老衰で死去いたしました。享年九六才。生前は高令会員だったので、皆さんによくして頂きそれが嬉しくて、集会の折は、よく参会していました。

秀爾が河上肇先生とお知合いになったのは河上家の家庭医、松田道作（道雄氏の父）さんの御紹介によるものです。

河上先生の選挙演説の時には、行先さきへついて廻って、喉頭に葉をつけていましたが、先生の学問や思想とは関係のないこと、あの味噌屋ハンと同様であります。しかし学問とは別に、先生の人格に尊敬の念を抱いたのも味噌屋ハンと同様だったようです。

父は一四才、宮津の高小を卒業してからは、東京や静岡で書生をしながら中学を出て、慈恵医専を卒業し、京都の初代耳鼻科教授、和辻春次博士の許で九年間修業しました。

従って（従ってではないかも知れませんが）学問とか思想とかには全く無縁であった、といえるのは、この会報のNo. 4に載った秀爾の一文を御覧になれば明瞭であります。

「大東亜戦争」と呼び、乃木大将を礼賛崇拝する一文は、息子の私が恥づかしくて仕方がないのです。

しかし、そういう父を会員に加え、あまつさえその父のアナクロ文章

を会報に掲載して下さるこの河上肇記念会は、なんと度量が広いなあと思ひ、これではなくては会が発展しないと感心している次第です。息子ですが、今回紙面を汚す機会を与えられ、まことに恐縮に存じます。

会員通信

。三好泰三（鳥取） 昨年の秋、法然院を訪ね、碑を仰ぎ慰めと共に忘れられぬ強い印象を受けました。

。両角康則（長野） 折あらばと思いつつ果せぬ人生の命題。いつぞやは訪ねん先生の墓前。

。河上莊吾（山口、岩国） 欠席しますが、皆様方によろしく。

。安藤重次（岡崎） 年老いて閉戸閑人となりけり、河上会は出席もせず。

。玉城肇（代） 小生一昨人物故、幽明境を異にしました。今さら出席しては人をおどろかすだけでしょう。

武蔵野の草すがれある夕かな

。田村敬男（京都） 十月十五日をもって京都ライトハウス理事および館長兼寮長を退職。十八年間の盲人福祉の仕事に終止符を打ちました。

在職中賜りましたご支援に御礼申し上げます。糖尿悪化、入院中。

。寿岳文章（京都、向日市） 外出不可能残念ながら不参。

。田中米一（京都） 病気のため欠席。

。菅野孝（東京） 左膝疾患、歩行不自由につき欠席。

。白石凡（東京） 病臥中、出席出来ず残念。

。岡部利良（京都） 手術の後遺症で静座困難、失礼します。

。末村潔（京都）目と足が少し不自由で欠席します。同封の金子通信費にして下さい。

。福島史郎（広島、三原）脳卒中の後遺症で療養中でしたが、十中八九は回復しましたので次回は出席出来ると思います。

。後藤嘉七（大阪、豊中）今回も勤務の都合で参加できませんが、河上全集を少しずつ読んで参加しています。

。渡辺美登（京都）八十五才のパパア、当日どうなるかわかりませんが、生きていたら幸いです。

。田中文蔵（横浜）今年はゼヒ出席し、久しぶりに脳村、一海両先生のお話を伺い、大門学兄はじめ諸兄にお会いできるのを楽しみにしております。

。八木隆（吹田）京都の音読会には時に参加しています。会費はどのようになっているのか気になっています。

。平良真徳（堺）今回は欠席します。「理由」一度も会費を納めたことがなく、よって早々に会則をお送り下さい。会費を納入して一会員になります。そのことが先決です。

。細野誠之（京都）会費を払い込みたいと思いますが、年会費の金額と振替用紙などあればお送り下さい。

。三村文一（徳島）杉原先生の相沢先生への追悼文の中で——「人間を愛する純真な気持」、熱烈な「人間愛」——お言葉に感銘深いものがあります。

。児玉誠（京都）相沢先生ご逝去の記事に愕然、他人事ならずとおもいました。宿がえにかまけて「煙」の発行を遅らせ恥かしく思います。あわてずふためかず、自重自戒、相沢先生の分まで長生きして、一号でも多く「煙」を出して行きたいと思います。

。永良巳十次（京都）先生が労働党から衆議院議員に立候補されたとき、先生の演説を聞いてから生きて行く道を決しました。

。大泉宗次（尼崎）大正十年、河上経済学と西田哲学にあこがれて、小樽高商から京大に進学し、直接、経済原論、ミルの原書をはじめ諸講義が想い出され、感謝。

。福島多一（京都）若い頃田舎から夏の講習に法学部の講堂へ講義を聞きに来た時を思い出し、懐しんでいます。皆さんのお話で先生の業績を偲びたいものです。

。福島正夫（東京）小生も河上先生の翌年、中野署に検挙されましたが、一ヶ月余で釈放、起訴に至りませんでした。

。尾崎隆（東京）先生が小首で書籍の配布をしておられた姿が今更のよう to 思い出されます。

。中井哲雄（千葉、松戸）会報に接することに、望郷の思いに似たなつかしさと、今まで連絡を怠っていたことへの自責の念に似たうしろめたさなどが、同時に湧きおこって来ます。過去にしばらく凡人の河上とは違うところです。

三

。古瀬重治（尼崎）最近の時勢を心配しております。老骨には何も出来ませんが、会員諸子の奮起を祈ってやみません。

。細井友晋（京都）だんだんとはなく急速に世の中が悪くなっている、人間がもっと素直なものに戻る必要があり、同時に英智を養う必要がある、河上先生を師表とすることが重要となっています。豊田秀男（岡山）ますます険悪な世相になりました。先生は地下でどう考えていられるかなど感じています。

。中西次郎（前橋）戦争の危険が身にしてみ感じられるいま、先生の生涯をしのび、平和のために微力をつくさねばと念じています。

。村中嘉明（小松）当地ではファントムの騒音で近い将来戦争が起るよ
うに思われてなりません。

。寿岳章子（京都、向日市）いつか来た道、どころではなくりました。
根本的な思考が日本には欠けています。何とかこの会も回顧する会以
上に――達筆すぎてあと読めません――

。永岡薫（京都）河上先生の学説の奥の思想や人格こそ、もっと素直に
現代に生かされたいものと願っています。

。佐藤克己（東京、国分寺）物、物、物の物慾至上と功利主義の日本の
繁栄は世界の資源を喰い荒して築いたものであり、何等の形で、世界
人民に還元しなかったならば、世界人民の怨みと反感を買うことにな
る。『だからかに歌はんとすればますらおの歌いとなき今の日本』と
歌った先生の獄中作は戦時中ではなく、まるで今の日本も歌っているよ
うです。今こそ河上精神を鼓吹さるべきです。

。武田正二（東京）はっとして寝覚めの胸に波打つは河上肇のいたぶる
心、こんな腰折れを教室に置いて、先生の学究としての姿勢と情熱を
敬慕しています。

。酒井一夫（茅ヶ崎）出席出来ませんが、河上精神を若い学生に伝えた
いと思っています。

。倉知三夫（京都）世界平和を実現する学問領域を開拓するよう努めた
いと存じます。「経済学」がすべてではないような気がしています。

。船山信一（横浜）「河上肇全集」刊行の機会に先生の諸著作を読み返
し、または始めて読んでいますが、先生の思想の発展を「再構成」し
て見ると、ヘーゲル哲学、西田哲学との関係などでも、面白い見方が
出来そうです。

。京藤英一郎（青森）遠くて時間的余裕がなく欠席します。全集を購入

しておりますが、仕事や雑用に追われ当初の予定どおりには進みませ
ん。当地ではあまり購入者は見当りません。

。岡田義雄（大阪）河上全集続刊、心から敬意を表します。

。秋本育夫（大阪）河上肇の全集勤務先が名城大学となりましたので、
名古屋の丸善に予約しまして小生の個人研究室に飾らせていただき、
毎巻たのしみしております。

。阿部市五郎（東京）小生八十四才まだ元気で働いています。先生の全
集も求めています。

。千田晴之（愛媛、川之江）昨年総会の折、岩波書店の方も出席して説
明下さった全集を定期購読しております。刊行に至った関係各位の方
に感謝の意を表します。会報10と11が未着です。綴じて大切に保管し
ています。

。大浜亮一（東京）全集が順調に出ていることを喜んでいます。記念会
報のバックナンバー揃えていただけないのでしょうか。

。大島久治郎（東京）一九四六年一月、先生がご他界のあと、二月に生
れた長男に「肇」と名を付けました。行きたいのは山やですが、先
だつものは何とやらで、それに年も年（七十一才）ですから、昨今は
足腰も弱くなり欠席。岩波の全集も無理してとっています。一海先生
の「河上肇、そして中国」も面白く拝見しています。

。大井清（大阪）詩人としての河上先生に絶大の敬意を抱いております。

。一海先生の紹介に感謝しております。

。石井公代（西宮）現在、一海知義氏の「河上肇そして中国」を愛読し
ております。興味深々です。

。西垣邦夫（小樽）全集の刊行順調、喜んでいます。一海先生の近著、

「尽日魂飛万里天」近々入手するのを楽しみにしています。百年祭の

時の小伝を軸に、「二階の河上博士」や獄中のキャラメルの話などを入れて、岩波ジュニア新書が出ることを希望しています。

。木村正身（高松）全集が完全予約制のため当地の書店にも全然並んでいず、実物を一般読者の目に触れないのは歯がゆく思われます。せめて主な書店に見本セット展示は叶わぬものかと考えますが……。

。富田健一（西宮）大阪の書店街に出かけ書物を漁ること近来少くなりました。つきましては会報に紹介されました新刊書、河上肇 芸術と人生。河上肇そして中国。など当日玄関受付にて拝見できれば幸甚です。

。井関安治（豊中）会員名簿の発行と全集購入勧奨を希望します。

六

。藤沢桓夫（大阪）先生を敬愛するなるべく若い作家に小説、あるいは劇、あるいはテレビ・ドラマの形で「河上肇」を是非書いてもらいたいなと思っています。先生の、殊に後半生は充分にドラマ的であり、必ず大きな反響を呼ぶと信じます。先生は国民的啓蒙の文学の主人公に最適の人ですから。

七

。大島清（東京）東京河上会でも先生誕生日の翌日（十月二十一日）例会を開き、その折、岸本陳重横浜国大教授の談話、「教科書問題と河上肇」を聴くことにしています。

西川 勉氏を悼む

「短かりし交りの追憶」

細 川 元 雄

NHK「テレビ評伝・河上肇」のチーフディレクターであった西川勉

氏が本年七月十五日急逝されました。享年四十八才。

私は同世代の戦友——同氏は今日の花形、テレビ・ディレクターである。私は大学のライブラリアンであり、ともに戦う友とはおこがましいが——として同氏の突然の逝去に、しかもそのことを一か月もあとに知ったことで、驚きと強い衝撃が今だに消え去らない。

故西川勉氏とは、「河上肇」を通じての交りであった。私がはじめて同氏に会ったのは、一九七九年、同氏が「テレビ評伝・河上肇」の取材に京都大学を訪問されたときであった。一冊の本（住谷悦治『河上肇』）を手にして、同氏は私の部屋にあらわれ、「テレビ評伝」の企画とその対象の一人河上肇とについて語られたとき、私は物静かな人であり、ひたむきに対象にせまる若き研究者の印象を受けた。しかし一か月ののち、取材班として大学に來られた同氏は、職業としてのテレビ・ディレクターの姿に強烈な印象を残して帰られた。放映された「テレビ評伝・河上肇」は、当時河上肇生誕百年祭の開催に参画していた私に、そして実行委員の人々に大きな励みとなり、とくに「河上肇展」の内容には大きな影響を受けた。百年祭の当日に、同氏と三たび会ったが、私が当日運営事務のため、落着いて話す機会を失ってしまった。

四たび、これが会って話す機会の最後となったのは、全く偶然であった。つぎの年の秋、京都嵯峨の大覚寺に「観月の夕」と翌日「彼岸の法要」とのテレビ中継に同氏がチーフとして來られたときであった。この寺の近隣に住む私は、同氏に小時間を乞うて来宅を願った。その時記憶に残っている話題は、スペイン取材のこと、伊勢、そして父君のことであった。数日後、父が河上のことにあふれているので読んで下さいと贈られてきたものは、同氏編集・刊行の『ひとすじの道——西川正巳遺稿集』であった。そのうち数回の通信をかわしたにすぎない、しかも本年六月の京大河上祭の数日前に同氏より電話をうけたのが声を聞く最後となっ

た。その折、同氏が東京河上会の幹事になられたことをうかがった。私は再び同氏と「河上肇」を通じての交りが深くなることを期待した。

西川勉氏の突然の死は、交際の範囲の極めて狭い私にとって、一つの損害である。それは短い僅かな交りであった。

私のこの文のサブ・タイトルと最後の一節は、有島武郎を追憶した河上の一文になぞっている。同氏のご冥福を祈る。

故西川勉氏を悼み、多くの方々が呼びかけ人となって、「故西川勉氏遺児育英基金募金会」が結成されました。東京河上会よりの依頼もあり、ここに「募金のお願い」を本会報に同封させていただきます。どうかよろしくお願いします。

河上肇記念会事務局

当 番 日 誌

◎総会の日には迫り、会報発送の準備整わず、急遽、京都駅裏に譲して朝余の策を講ずることとする。

◎総会の日、更に迫り、代表世話人杉原先生の許へ会報届かずの報入る狼狽するもチェックの方途なく、会員諸子への到達会報の遺漏甚しきを怖れ、且つ、事務の杜撰を恥ずるもせなし。

◎総会の前々日、五〇余名の会員の方々の参加が得られることが判明して安堵。

◎河上肇記念会総会当日。天青く雲白く十分に晴れ、細川氏と嵯峨の秋より東山法然院の秋に入れば、美女、大門氏と共にあり。

◎東都新宿に東京河上会の藤原氏に遇い、総会の模様等報告す。河上肇アルバムを出した西川勉氏の逝去について会報に記すことなく、おくれ

ばせながら追悼の文につき依頼す。あの本は河上肇を次代に引継ぎ広めて行くのに恰好な入門書の一つではなからうか？普及頒布の策ありやとまどえども、知恵なし。会員諸子のアイディアを拝借したし。

◎会報12号は一三〇四通発送して、七六通が転居先不明等で戻って来ました。その他に会員の方々のご連絡による住所等の修正も相当数あります。訂正は会員等仮名簿で行いつつあります。訂正は手数さえかければ済みますが、転居先不明では次の会報からは送れなくなり、事務局を通じての連絡はブツンと切れてしまいます。お引越しの際は事務局へのご通知もぜひ下さいますように。

◎五七年度会費は事務局・活動不足のために、あまり集らなかった。事務局としては申訳なくもあり、恥しくもありして、五七年度会費については私供の方から会費の納入のお願いも出来ない気持だった。だが現実の財政事情は会報を出す毎に窮して来る。今回の会報と名簿の印刷費や発送費は借金でまかなうより他はない。会員の方々が積極的に会費を払って、もりたてて下さるような会にするには、事務局は如何に活動すべきか？自己批判し自らに鞭打て。会員諸子の批判もよろしく。

蛇足

文中、「天青く雲白く十分晴れ」は当日の実景ですが、岩波版中国詩人選集第八巻「陸游」からの盗用で、河上肇全集第二〇巻よりの引用ではありません。全集の放翁鑑賞では気付きませんでした。あったかなかったかは、両書の最高権威者に何えは正確無比の回答が得られるはずですが当番はそれをサボっています。この詩の結局「宦情はもと詩情に似ず」とあります。それに比して当番は何と申すべきやら。

(大久保 記)